



Title	来し方を思う
Author(s)	林, 栄一
Citation	大阪外大英米研究. 1987, 15, p. 1-8
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99096
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

来 し 方 を 思 う

林 栄 一

不来方のお城の草に寝ころびて

空に吸われし十五の心

これはいうまでもなく啄木が過ぎにし少年の頃を偲んだ歌である。来ず方というのは、盛岡の城を築いた不来方貞頼のことで、表題の「来し方」との語呂からふと思いついてまでのこと、別に何の関係もない。しかし、これを引いたのは、心情的に何か惹かれるものがあるからである。

私は昭和62年2月末日を以て退官することになっている。「いよいよ」である。何の因果か学長という職を汚したため、定年を2年も超過したのであるが、お陰で大阪外大で40年になんなんとする歳月を過ごしたことになる。もちろん学校では最年長の古狸というわけだが、自分の気持ちではそんな実感はない。とは申せ頭はうすくなり背もまるくなっているのだから、他人からみれば老人の部類に入ることは間違いなかろう。考えてみれば、はるけくも来たものである。しかし自分にも少年の頃があった。巷間に生まれ育ったので、啄木のようなロマンチックな風景はないけれども、空に吸われた夢はあった。家並のかなたに赤い夕焼けを見上げて、何とはなしに大きな期待感に胸をふくらませたことがあった。思えばなつかしい。

私のたどった軌跡は、還暦記念論文集（くろしお出版）に大体のことを記してあるので、ここでそれを繰り返して述べるのも気がひけるから、なるべく未発表の部分を述べたいが、多少の重複はお許し願いたい。私の父は岐阜の山奥の、孝子で有名な養老の滝に近いところから、大阪へ出てきて、鶏卵の間屋を手広く経営した人物で、それなりのアクをもっていたように思う。母は「藤惣」という少しは名の知られた海産物問屋の娘で、かなり気位は高かった。二人の

間には9人の子供が儲けられ、私はその5男として生まれたのである。商家であつたので、息子たちはいずれも商人とし身を立てることになっていたのであるが、私はその中では、何をやらせても出来の悪い役立たずの子供であつたから、小学校を出たら丁稚奉公にやられる破目にあつた。しかし、せめて中等教育ぐらいはという兄たちの情けで、市岡商業の入試だけは受けさせてくれた。3倍ぐらいの競争率で、受からなかったら丁稚に行くという割り切った選択だつた。ところがひょっと合格してしまい、簿記だとか珠算だとかを習うことになったところ、一向に興味がわかず、これではまちがった学校に入つたのではないかと悔やんでいた。ところが、英語の先生（大阪外語の臨教出身）に眼をかけてもらい、校内の英語の暗唱会などで一等賞をもらったりしたものだから、つい英語を得意がることになったのが運のツキということになる。ツキがよかったのか悪かったのか、自分の才能のなさを、今となつてはつくづく痛感するだけに、皮肉な運命の糸車に操られたような気がしてならない。

ともあれ、何とか商業学校は卒業できることになったが、同級生は家業をついだり会社に入るのが殆どであつたのに、私はもう少し勉強を続けたいという思いがつのつて、親に無理を行つて大阪外国語学校の英語部に入つたのである。入学してみると、後年朝日新聞で名をあげた辻 豊・津島一夫君などを始めとして英語のベラベラな連中がいて、それまでもっていた多少の自信も音をたててくずれてしまった。当時の英語部主幹は古武士の風格のあつた吉本正秋先生であつたが、教授陣には江戸っ子肌の本多平八郎、英国紳士風の上田耕甫、飄々とした森沢三郎（西洋史兼担）、カランビア大 PH.D. の大平頼母（商品学兼担）の諸先生がおられた。外国人の先生ではグレン・ショーとウィリアム・ジョウンズのお二人がおられた。尚紅蓮氏の授業は特に有益であつたように思う。当時日米学生会議というものがあつて、私は昭和14年の夏休みを利用して参加することができ、ロス郊外の南加大学で会議をもち、帰途はカナダのバンクーバーに立ち寄つたりした。私はその時20才、アロハで迎えられたホノルル訪問、夜明けに金門橋をくぐつたときの感激など、いまでもあざやかな印象が残っている。しかし時代は第二次世界大戦に向けて緊迫しつつあつた。旅行中に

来 し 方 を 思 う

イギリスがドイツに宣戦布告したニュースを聞いて愕然としたことを思い出す。

外語を出る段になって、私も会社に就職すべしであったのだが、またぞろ悪いクセが出て、もう少し勉強したいと思うようになった。いわゆる支那事変が始まっていて、外語は比較的ノンビリしたところがあったけれども、仮装行列などの行事はなくなっていたし、軍事教練の強化もあって、学生生活も不自由になっていた。そんな時期だったからこそ、いずれ兵隊にとられる前に、少しでも勉強をしておきたかったのである。私はいつとはなしに細江逸記氏の著書やイエスベルセンの文法書などを読みふけるようになっていたので、この道の学問を追求する願望が強かったためである。当時専門学校からは東大や京大の入試を受けることができなかったから、東北大か九州大かということで、結局後者を選んだのだが、理由は極めて簡単なことで、寒いところより暖かいところがよからうと思ったからである。これも余談になるが、九大を受験するとき、今まで親の意向に背いてきたので、せめてものうめあわせに、商家に育ち商業学校も出ていることだから経済学を専攻しようかと考え、その願書をもってポストの前に立ったのであったが、いざ投函しようとしたとき、やはりやりたいことをすべきではないかという天の声を聞いたような気がする。私はその場で願書を破りすてて、改めて英文科への願書を書いたのである。賽は投げられてルビコンを渡ったわけで、私の生涯はこれで決定したといえる。

ここまでくれば、私の学問的志向は英語学にまっしぐらとなった。九大では豊田 豊先生と中山竹次郎先生に師事したのであるが、両先生とも、どちらかといえば文学に傾斜されていて、英語学プロパーの専門家ではなかった。勿論、スイート、イエスベルセン流の英語学の造詣も深くて、文学一辺倒でもなかったのであるが、昔の学者は今のようにならざるに渾然とした立場で、幅の広い講義をなさっていたわけである。若い生意気な私は、それが不満であった。私もご多分にもれず、詩を作ってみたり、小説を書いてみたりする文学青年であった時期もあったのだが、それはあくまでも趣味の世界であり、学問としては客観的データに基づき恣意性を排除する、英語がターゲットである言語学でなければならぬという気負いがあった。今にして思えば、恥ずかし

い限りであるが、それにしても純心であったと可愛く思わぬわけでもない。そこで、私は可能な限り、いろいろな言語を学んだものである。サンスクリットの講義に出て、学生のなかった担当の教授を狂喜させたこともあった。泉井久之助先生の諸著作を耽読したのもその頃である。卒論は「格」を扱って、現代英語には格はないと断言して、無茶なことを言うなと叱られたが、稚気愛すべしと思われたのか、意外に高い評点を頂いていたようである。時勢は厳しく、在学中に徴兵検査を受けさせられたが、3回生のある朝、ついに対英米の宣戦布告が報ぜられ、半年繰り上げ卒業となった。いずれ戦線に駆り出され、まず死は免れないと覚悟したが、卒業までの間できる限り勉強しようと頑張ったのは、他に能がなかったからではあるが、思えば我ながらけなげであった。卒業と同時に兵役に服することになっていて、私は大阪の八連隊に入營するはずのところ、豊田先生の勧めがあって、海軍予備学生に志願した。当時開通したばかりの関門トンネルを通して大竹海兵団に集められた第2期兵科予備学生は、船に乗せられて台湾の高雄に近い東港海軍飛行隊基地で訓練を受けた。階級的には兵曹長より上だったから、術科を教える下士官に「軍人精神注入棒」で撲られることがなかったのは幸いであった。それから私は教官配置で、鹿児島海軍飛行隊、土浦海軍飛行隊、海軍兵学校と転属させられた。兵学校で当時校長をしていた土方成美中将に着任の挨拶に行ったとき、海軍はほかで止めても英語の授業は続けるからしっかりやって下さいと丁寧な言葉使いでいわれたのには恐縮した。えらい人だったと思う。そのうちに、シンガポールの第一南遣艦隊司令部付の辞令を受け、駐泰日本大使館付の海軍武官府に勤務することになり、バンコクに飛んだ。私がそこへ呼ばれたのは、同盟国のロイヤル・タイ・ネイビーとの協同作戦を行う為、英国で訓練された士官たちと連絡をとるのに英語が話せる将校が必要であったからである。時には単身でタイ国海軍大臣と面会して交渉したこともあった。やがて戦局が悪化、ついには現地でも敗戦を迎えたが、タイ国に進駐してきたマウントバッテン指揮下の司令部と接触する日本海軍の連絡将校となり、在泰陸海軍将兵を内地に還送する仕事に従事した。最後に私が帰るとき、お前は残ってシンガポールの戦犯裁判の通訳に行けと言わ

来 し 方 を 思 う

れたが、結局は断罪される同胞を見るのは何としてでも避けたいと、必死で工作して命令を撤回してもらった。やっとの思いで帰国したのが昭和21年の12月の末で、数日分の乾パンをもって日暮の大阪駅頭に降り立ったことであった。寒い日であった。

当時私の家は十三にあったのだが、空襲で焼かれて跡かたもなかった。しかし、その焼跡に親たちは最初に触れた岐阜の山奥に疎開していると書いた立て札があったし、また全くの偶然であったが兄にめぐりあえるという幸運もあって、暫く兄の家に寄食した。交通公社にいた先輩を訪ねたら、その気があるなら明日からでも入社させてやるといわれたが、丁度そのときNHKの大阪中央放送局で英語のできる局員を募集していることを知り、早速応募したところ採用され、当時占領軍の検閲があった放送原稿の翻訳や調査にくる米軍将校の通訳などをした。そのうちに、森沢先生から母校に来ないかという誘いを受け、正月の元旦から勤務する放送局より休みの多い教職がよいと考え、母校に帰ったら、何と月給は3分の1になってしまった。私はその時は独身であったから、自分さえ辛抱すればよかったが、妻子があったら、そんな思い切りはできなかったであろう。当時学校は高槻の砲兵連隊のあとの兵舎であった。食糧事情は極端に悪くて、学生も先生もまともに勉強する余裕はなかったが、それでも廃墟の中から立ち上がろうとする意欲があって、苦しいながらハリのある毎日であった。何の設備も無い兵舎の学校には活気があった。私はまた豊田先生の紹介で神戸垂水の神戸経学（今の神戸商大）にも出講したが、2時間以上もかけて電車に乗り、急な坂を駆け上がる朝の授業に毎週精を出した。空腹をかかえながらも元気な時期であった。

暫くして私は京都大学の言語学科に内地留学をした。泉井先生に直接教を請うて、内的言語の問題に没頭したのだった。学問的情熱が沸っていたといえるかもしれない。そのうちにガリオア資金によるアメリカ留学の募集があって、私は欣然と応募して幸い合格し、ミシガン大学大学院に学ぶことになった。二度目のアメリカ訪問である。最初はイリノイ大学でオリエンテーションを受け、アンアーバーのキャンパスで寄宿舎に入り、アメリカ人の学生と同室の生活を

しながら、フリーズ教授やラドー博士やマークワート教授らの講義に出席した。バイク教授の音韻論は特に面白かった。というのは、私は以前から有坂秀世博士の『音韻論』に非常な興味をそそられていたからで、それがブラーグ派のものであったのに対し、バイク氏のはサビアから始まり、ブルームフィールドに連っていくアメリカの構造主義のものであっただけに、とても新鮮な感じがあった。フリーズ博士の英文法論や教授法の講義も同様な線上にあるものであった。戦時中外界からの情報を遮断されていたわれわれは、聞くもの読むものすべてが新しい驚きであった。市河三喜編『英語学辞典』も、せいぜいブラーグ派どまりで、ブルームフィールドの『言語』は入手されていたが、その包蔵する意味がまだよくわからなかったのである。

このことは、当時若手の英語学研究者が大塚高信博士の呼びかけで結成した「大阪英語学談話会」の席上で、大塚先生自身が述懐された通りで、先生自身は「自分の不明を恥じる」とまで言われたことがある。この会には京阪神在住の新進気鋭が集まっていて、このグループでいろいろな著作や論文集を出したり、検定高校英語教科書を作ったりしたが、かなりの期間続いているうちに、メンバーも年を重ね、それぞれの学校で要職についたりしたので、とうとう解散をすることになった。最後の集會を箕面の料亭で行ったのは、後年に箕面に移転する大阪外大に職を奉じた森塚さんや私にとっては奇しきことであった。

一時全国の大学に吹き荒れた学園紛争も忘れられぬ思い出である。当時私は学生委員会の委員長をしていて、連日連夜牧執行部と共にその処理にあたった。火焰瓶を投げ、鉄パイプを振りまわす過激学生を相手にした経験は、今となつてはむしろなつかしい気がしないでもない。沈静化したあとの無気力は、その後の入試制度と無関係ではないかもしれないが、とに角悪夢としかいいようがない。私は元来行政には向かない人間であったのに、運命のいたずらで管理職につかされ、結局不徳のなせるわざと、諦めざるを得ないのであるが、学問の道からは疎外されてきたのであるから、本当のところ残念無念である。特に学長職についてからは、日常業務に追いまわされ、腰をすえて勉強する時間がほとんど奪われてしまった。唯一の救いは、関西言語学会を主宰することが続い

来 し 方 を 思 う

ていることで、本学出身の会員の活躍は、何としても嬉しいくまた頼もしい。なお、この間英語学科の主任をしていたとき、ファリシー客員教授と組んで、毎テレビから「キング・アーサー」を1クール連続放送したことがあったが、面白い経験であった。さらに国費第1号のLL設置に旗を振ったのも思い出である。

私自身はデンマークの碩学イエラムスレウの提唱したグロセマティクスにのめりこんで、もちろん一辺倒ではないのだが、この理論の実践に、かなり精力を費やしたことがあった。この理論との出会いは、ミシガン大学の図書館で小さなイ氏の論文を読んだことで、「シラブルは音声の実質とは無縁である」という主張に大きな衝撃を受けた。続いて「プロレゴミナ」に接して、私がそれまで持っていた言語学の知識は微塵に碎かれて茫然としたことであった。それだけに、しびれるような興奮にかられ、イ氏と文通したり、シエルツェマ氏の解説に頼ったりして、『言語理論序説』（研究社）を出したが、あまりよい出来ばえでなかったものの、歴史的な意味はあったと思っている。その後チョムスキーの生成文法の出現となったが、それにあまり抵抗を感じなかったのは「言理学」（言素論）との連続がどこかにあったからであろう。その後の生成文法の展開はめざましいものがあり、正直に申して十分なフォローアップはしてないのが実情であるが、他の文法理論と共に、今後は時間ができるので勉強していくつもりである。まだすっかり引退してしまうのは早いと、主観的には考えている。主な関心は英語の音韻を徹底的に解明することで、おぼつかないが、やれるところまでやってみたい所存である。

以上「来し方」のよしなしごとを、ざっと思い出すまま綴ってきたが、随分多くのことを紙数の関係で割愛した。人間一人の生活には四方八方に網が張られてあるから、交友関係一つにしても書きだせば際限がないから、敢て述べることはしなかった。それらは別に述べる機会があろうかと思う。ただ私というつまらない人間が、これまでやってこられたのは、けっして私一人の力ではないということ、しみじみと感ずる。考えてみれば、まがりなりにも学究としての道がたどれたのは、すぐれた師や友や学生に恵まれたからで、これらの人

たちの支えがなければ、到底一人立ちはできなかっただろうと思う。学長としても、本当に凡庸極まる存在であったが、執行部関係の教官や事務当局の格別の支援があったればこそ、何とか身がもてたのであって、これもありがたい極みである。外大の教職員、とりわけ英語学科の教官諸氏のご厚情は身にしみている。去るに臨んで、無量の感慨をこめて、皆様にあつくお礼を申し上げる。外大の発展と諸氏のご健勝を衷心より祈願する次第である。

(おわり)